

# 学校体育の存在意義に関する一考察

## A Study on the Reason for Existing of Physical Education

1K05B177

根本 沙希

指導教員

主査 友添秀則先生

副査 吉永武史先生

### 【研究の動機】

大学に入学するまで、学校体育の存在価値は私の中で絶対的なものであった。というより、学校体育の存在価値など改めて考えてみたことがなかったのだと思う。しかし授業や演習を通じて、今まで見て見ぬふりをしてきていた、学習内容の貧弱な体育の授業や、学校外でも誰もがスポーツをする機会が増えた現在の状況などを考えた際に、果たして本当に学校体育は必要なのだろうか、という疑問が生まれた。

将来体育教師志望しているにも関わらず、学校体育の存在意義に疑義を持っているということは絶対に避けたい。また実際に現場に立ったときには、信念を持って体育授業をしたいと考えとともに、学校体育のアカウントビリティーに自信を持って応えることのできる教員でありたい。

そのために、体育原理、身体観、体育における人間形成、現代の社会状況などのさまざまな視点から体育授業の必要性を検討し、学校体育の存在価値を明らかにしたいと考えた。

### 【研究の目的】

本研究の目的は、以下の3点である。

1. 今までの学校体育の存在意義がどのようにとらえられてきたかを批判的に検討する。
2. 学校体育の存在意義がなぜ問われることになったのか、その転機を明らかにする。そして、そこで浮かび上がった学校体育の問題点を提示する。
3. その問題点に対して、学校体育の存在意義を主張するにあたり求められることを検討す

る。

### 【研究の方法】

本研究は関連文献講読による文献研究とする。

### 【各章の概要】

#### 第1章 これまでの学校体育の存在意義

近代国民国家成立期の「身体の教育」から戦後の「運動による教育」を経て、脱産業社会における「運動の中の教育」に至るまで、学校体育の存在意義がいかんして生まれ、維持されてきたかを批判的に検討する。そこで見えてくるのは、他者否定によって自己拡張を図る、「閉じられた共同体」にとっての存在意義であった。第一次・第二次世界大戦、そして冷戦と世界化した戦争を繰り返すなかで、個人は「閉じられた共同体」の脈絡の中に置かれ、そこにおける有用性に体育は呼応し、その存在意義を主張してきた。

#### 第2章 学校体育の転機と問題

グローバル化による「閉じられた共同体」の論理の破綻、さらに学校のスリム化と地域社会における教育・文化活動の活発化という時代の流れのなかで学校体育の存在意義が揺らぎつつある。そこで浮かび上がった学校体育の問題とは、体育科の対応する文化領域を不問にしてきたことにより、教育内容を曖昧にさせ、子供の身体的・認知的発達課題のとの関係性に立脚したスポーツ技術の系統性や学習の順次性を明確にしなかったことである。

### 第3章 学校体育の問題の解決策

学校体育の問題を解決するためには、スポーツや体育の基本原則である教科体育原理を基に、どのような授業を行えばどのような成果が期待されるかという検証授業がさかんに行われ、一般化されていく必要がある。さらに日本の現在の教育制度や教師教育のあり方を見直し再構築することで、学校体育の存在意義を保証していくことができると考えられる。

### 結章 本研究のまとめとこれからの学校体育の展望

現代の子どもたちの運動する機会は、少子化や遊び環境の激減、室内遊びの対象としてのT

Vゲームやパソコン等の浸透などによって、通常の生活環境の中でますます減少傾向にある。身体運動の減少によって人との直接的交流や共同体験が減り、子どもたちの社会性や対人関係能力の発達が阻害されることが懸念される。それに対し、教科のなかで唯一の身体運動をともなう体育は、「人間関係の築き方」を学ぶ場として多くの教育的可能性を備えている。それは3章で示した、学校体育に関する様々な環境を整えていくことが前提とされている。それが実行され、体育科の意義・価値をより明確に打ち出していくことが、これからの学校体育の存在意義を保証し、学校体育のさらなる展望が開けるのではないだろうか。